

禅僧天田愚庵の『順礼日記』 —— 熊野詣で、の記述を読む ——

林 雅 彦

1

臨済宗の僧・天田愚庵（安政元年〈1854〉～明治37年〈1904〉）が、京都・清水産寧坂（三年坂）の草庵を出立、西国順礼の旅に赴いたのは、明治26年（1893）9月20日、そして帰庵したのは、同年12月21日、愚庵40歳のことだった。京都から先ず伊勢の大廟（伊勢神宮の外宮・内宮）に詣でた後、所謂熊野古道伊勢路を経て、熊野三山に参詣、那智山青岸渡寺を振り出しに、西国三十三番観音霊場の順礼に歩み出したのである。その折りに記した『順礼日記』⁽¹⁾中から、本稿では熊野三山に関わる部分を取り上げ、当時の熊野地方の風俗習慣や人情、愚庵の心情について考えてみたい。

2

天田愚庵は、アメリカのペリーが浦賀に来航した安政元年に、奥州磐城国（福島県）平藩士^{いわけ}の家に生まれた。

自ら記した『血写経』⁽²⁾（「台麓学人筆」となっているが、愚庵の書である。明治23年（1890）5月、親交のあった陸羯南^{くがかつなん}——当時新聞「日本」の社主——に送ったもので、饗庭篁村が改稿したと思われ、新聞「日本」に連載）は、愚庵が18年間辛酸を嘗めて父母と妹の行方を尋ね求めた前半生の自伝で、15歳から遁世出家するまでが記述されている。それによると、平藩の勘定奉行となった甘田平太夫（隠居後は「平遊」と号す）の五男^{なみ}で、母は浪^{なみ}と言ひ、兄弟は多かつたが、明治の戊辰戦争の頃には、既に長兄善蔵と久五郎（愚庵）、それに妹延^{のぶ}の3人となっていた。

戊辰戦争に際し、「甘田平遊は長子善蔵を出陣させ、（中略）十五になる久五郎と、十一になる妹お延とが、父を慰さめ母をいたは」⁽³⁾って暮らしていた。その間兄善蔵の重傷説や討死説の噂も流れ、久五郎も武士として出陣をとの父の考えから、久五郎自身もその気になるが、母の嘆きは大きかった。明治元年（1868）7月1日、久五郎は元服して出陣するも、同13日に平城は陥落し、彼は仙台へと逃れたのだった。

頼りとする久五郎まで出陣となる折りの病身の母の心中はいかばかりだったか。『血写経』によれば、次の如く記されている。

婦女は常さへ胸狭く、さらぬ別も哀むもの、是は愛子を生死の争ひの場へ出すことなり、殊更其身は病に罹り頼みにも便りにも久五郎一人を杖柱とせしに、今ま別れと聞きてハタと倒れ咽び入るのみ詞はなし、背を撫さずるお延を力に居り直して重たげに膝へ手を置き、涙の隙の聲も微に悲しき事を聞くものかな、兄はたしかに新田山の戦ひに討死せ

しとのこと、又昨夜の夢にも姿を見れば大かたは凶兆にて噂が誠なるべきなり、さるに今また久五郎よ、其方に別れて何とせん、父上は義氣を張り其方の出陣を勇ましと許し玉へど、心の奥の苦しさはよも母には劣り玉はじ、母の病は其方兄妹の志しのあつきに熱も負けて快き方にはなりたれど、まだ起居も心のまゝならず、其方に棄られて悲みを増さば力は落ちて瘦まさらん、父上とていろいろの事に今年はいたく老玉へり、今にも矢玉の此處等まで来らば三人は何となるべきぞ、(下略)

(傍線引用者。以下同じ)

この戦の間に、父母妹の3人は行方不明となってしまったのである。かかる出来事が、明治26年の愚庵の西国順礼の契機となったことは自明である。

また、『血写経』と銘打ったのは、その巻頭に「東坡が詠歌せし朱氏の子は、五十にして二十餘年、いまだ死生の消息を得ず」と記述した如く、朱寿昌の母を探し得た事例にあやかうという愚庵の強い意志(願望)が籠められていたのだった。

3

明治4年(1871)愚庵18歳のこの時、新政府によって廃藩置県が施行されるが、「甘田」を「天田」に改姓、「五郎」と名乗った。明治9年(1876)23歳の春、帰郷の身となった。この時、「吹く風は問へど答へず菜の花の何處や元の住家なるらん」と詠じている。

半年後、今度は東北・北海道に父母と妹搜索の旅に出て行く。

前後するが、明治5年(1872)、終生の師と仰ぐ山岡鉄舟と出会い、その門下生となった。また、明治10年(1877)、司法学校生の陸羯南とも交友することとなる。この翌年、静岡の地で山岡鉄舟と会うも、その際軽率な行動を叱責され、その身は清水次郎長(山本長五郎)に預けられた。

さらに明治12年、死んだと噂されていた兄善蔵(「直武」と改名)に再会し、家禄奉還金二百円を分与されたが、その内の百円で兄と連名の上、父母及び妹搜索の新聞広告を載せたが、依然として3人の行方は手掛りが掴めなかった。

かくして、明治14年(1881)、清水次郎長に請われて養子縁組を成し、山本五郎・鉄眉と改姓名し、以後次郎長の片腕として富士山麓開墾事業の監督を勤めたが、明治17年、新政府によって博徒大検挙が行われ、義父次郎長も捕えられて入獄の身となった。そこで、次郎長との養子縁組を解消し、旧姓に復した。この間の体験や見聞を踏まえ、山本鉄眉の名で『東海道遊侠伝一名次郎長物語』を著したが、本書は、後に講談・芝居・浪曲・映画等の原作として今日でも著名で、愚庵の文才の一端が窺われる。

4

天田五郎が山岡鉄舟の紹介で、次に京都・林丘寺の由利滴水禪師に参禅して鉄眼てつがんと称するようになったのは、明治19年(1886)のことだった。

かくして、愚庵38歳となった明治25年（1892）の春、清水産寧坂に自坊を設け、師匠滴水禪師から与えられた「莫認小智 須至大愚」という偈文に基づいて、その自坊を「愚庵」と名付け、さらに自らも「愚庵」と名乗ることとなったのである。

翌26年9月22日の秋彼岸に京を出立、件の西國順礼へと赴いたのだった。彼の『順礼日記』を繙くと、陸羯南から寄せられた序文の後に、愚庵自らも、予め人々に勸進帳を廻して喜捨を乞い求めた際の一文を引いて、

己れ素懷を遂げてより、早や七年と成りぬ、一には父母菩提の爲め、二には衆生結縁の爲め、西國順禮を思ひ立ち、今年六月、遂に勸進帳を出して、世の淨財を集む、其文に
曰

西國三十三番の靈場は、救苦の本願觀音薩埵、大慈大悲の皆を垂れ給ふ、華法皇曾て普く臨幸ましましてより以來、天下順禮の跡を慕ふもの甚だ多し、某身を三寶に委ね其志いよいよ切なり、今茲秋季彼岸を期して、草廬を發錫せんと欲す、依て結縁の爲め、敢て普く十方の淨財を乞はんとす、蓋し人に貧福の分ありと雖も、勸進の高多き時は即ち結縁の數自ら減じ、喜捨の財輕きに過ぐれば以て歸依の信と爲すに足らず、故に貴賤平等金三錢三厘と定む、是より多きも受けず、是より少きも亦た受けず、嗚呼、善男子善女人、三界の火宅を出で輪廻の苦を免れんと思はゞ早く隨喜の誠を致して、菩提の縁を結び給へかし、穴かしこ。

明治御宇二十六年六月

京都東山清水の片邊に

愚庭 鐵眼 敬白

斯くて宿願空からず、百日の内に千五百五十人の隨喜を得たり、中にも本庄安子といへるは新に白衣を裁ちて、東京より送り越しぬ、是れは我が道中著ふるしたるを乞ひ戻して、經帷子にせん爲めとぞ、（下略）

と記述している。即ち、1550人から一律1人3錢3厘の喜捨を得て、順礼を成し遂げたのである。

師の滴水禪師からは、笈摺の背左右に愚庵の両親の戒名を記入した一領と、下記のような参籠手形とでも言うべき添状をもらっている。

京都府山城國愛宕郡修學院村

林丘寺門主滴水徒弟

鐵眼 四十歳

今般西國三十三所順拜候に付爲結縁各靈場本尊前に於て拜宿通霄致度心願御差支無之限は便宜御許容の程奉懇願候右添書如件

明治二十六年九月

各嶮靈場

執事高位

持物と言え、食鉢・桐油合羽・33枚の納札（木札）など順礼に必要な最低限の品々を袱子ふくすに収めて、京都から比叡山中堂や日吉大社を順拝し、伊勢神宮の外宮・内宮に参拝、さらに熊野古道伊勢路を熊野三山へと進んで行った。勿論目指すは西国観音靈場第一番札所的那智山青岸渡寺である。

ここで参考に供すべく、湯本喜作氏『愚庵研究』（日本文芸社、昭和38年8月）に収められた順礼時代の愚庵の写真を下に掲げておく。



天田愚庵

5

間もなく荷物を4貫目（約15キログラム）から半分の2貫目に減らし、宮川、田丸、三瀬の地を経て、熊野古道伊勢路の難所荷坂峠も越え、紀伊長島で1泊すると、10月となった。続いて尾鷲で2泊し、これまた難所とされる八重山越えを避けたコースを取り、矢の川峠を越え、漸く熊野川上流に至り（現在の三重県から和歌山県に入り）、玉置口から瀨八丁どろを経て、湯の峯に到着したのは、10月5日のことである⁽⁴⁾。

6

10月5日の記事からは、濡れそぼり、疲れ果て、衣も汚れ切った愚庵の姿が眼前に浮かび上がってくる。

雨を冒して立ち、出合より熊野川に沿て上る、川合、敷屋、津賀等を経て、受川に出で、湯峯に至る、こゝは名にし負ふ熊野の温泉場なり、足の腫ますます募り、衣裳も痛く汚れたれば、暫し逗留して、洗濯もし、湯治もして後、本宮の社殿に參籠せんと西善といふを主と定む。けふは四里餘

翌6日も降雨のため、宿で亭主から湯の峯温泉の由来や、薬師堂・東光寺の昨今などについて、

今日も雨降る、亭主来りいろいろ物語す、温泉の由来を尋ぬるに、此地上古は熊野湯原郷と稱し、中頃湯棟と云ひしが、慶長の頃より湯峯と書き變へたり、成務天皇の御宇、國造大阿刀宿禰、始めて此湯を見出し、文武天皇以下數朝の帝臨幸ましまし、こと、前後二十餘度に及びぬ、仁徳天皇の御宇、裸形上人と聞え給ふ尊者、湯壺の中に自然佛あるを見出し給ひしを、後に弘法大師が殿舎を建て給ひて薬師堂と稱し、其後天仁元年、鳥羽天皇勅して再建し給ひ、天正十八年關白秀吉公又之を再造し、寛永以後は幕府常に其資を助くと記録に見え、別に鳥羽天皇の勅願に依て建て給ひし、二重の多寶塔、明治の初めまで歴然としてありしを、如何なる故にや本宮の社人が打毀ちぬ、其時里の者共いかにもして保存せんと、嘆き止めしかども力及ばず、此塔は三間四面、古體にて尊きものなりしを、今は其跡だになし、薬師堂の傍に東光寺と云へるは、眞言宗なりしが、其時廢寺と成りたるを、十年許り前に、那智の順孝法師が再建して、今は天台宗となりぬ、民家は慶長の頃十二戸と云へど、現今は二十四戸あり、湯は三等に分ち、西は下等、湯槽二つ、中は中等、湯槽大きなが一つ、小きが六つ、東は上等、湯槽一つ小栗の湯と云ふ、湯錢は、上等は二錢、中等は一錢五厘、下等は一錢五厘なり、其他處々に熱湯湧き出れども、湯槽なし、湯の効能は、金創、皮膚病、胃弱など、猶數々言擧したれど、忘れたれば記さず。

の如く、延々と聞かされたので、末尾の記述は、うんざりした愚庵の様子が見てとれる。

翌日からは晴天続きで、9日熊野坐神社（熊野本宮大社）に詣でる。

けふも晴る、本宮の御社に參詣す、湯峯より二十五町なり、音無川、里の中央を横切りて熊野川に入る、去れば昔はこゝを熊野音無里といひしとかや、御社は元兩部にして、本地は阿彌陀佛、垂跡は十二社にして熊野大權現と稱へ奉りしを、今は國幣中社となり、熊野坐神社と申奉る、二十二年の洪水に十二社の内、八社は押流れ、残れる四社を故の地より三町許り北の岡に遷し參らせ、流れ給ひし八社の神は、故の地に石室を造りて、其内に齋ひ籠め奉る、此洪水は千古未聞の大水にて、水嵩常より七八丈も増し、殊に鐵炮水とて、川上に山崩れあり、堰き止められたる水の一度に破れて押し來れるものなれば、兎角する間もなく、古來神庫に秘めありし寶物、古記類、残らず流れ失せたりと云ふ、全村二百七十戸の内、流亡したるもの百八十戸溺死したるもの二十三人、斯る水害

の後なれば、民家は今猶小屋掛けにて、目も當てられず、昔は歴朝の聖主、屢々龍蹕を廻らし給ひ、平家の歸依も篤く、繁昌し給ひし御社の、斯くさび給ひしは、いとも畏こし、今の社殿は白木造りにて三棟、東のはづれは天照皇太神、中なるは家都御子大神、西なるは熊野夫須美大神、速玉男尊、合殿におはします、(下略)

上の記事は、明治22年(1889)の大洪水で大齋原^{おおのほら}にあった本宮大社十二社の内、残った四社だけがここから約三町北の高台(現在地)に移築されたという。加えて部落の半数以上が流出、溺死者も23人出たという。眼前の光景に愚庵は「目も當てられず」と動転したようである。省略した部分には、今日から十七社殿に参籠したい旨社務所に願ひ出たが、許されなかったため、仕方なく大齋原へ行ったが、その地はすっかり荒れ果てていたと書き留められている。いかに大きな水害だったかが、知られる。

再び雨天が続き、漸く晴れわたり、愚庵も湯治のお陰で心身ともに「無垢清浄光」の16日を迎えた。本宮から川舟に乗って新宮へと向かうが、「水嵩三四尺増して、流れ急」で、4年前の洪水以来濁っているという。舟上から兩岸の奇岩や滝々を眺めつつ下る途中、船頭が左右の景観を説明する内に、新宮近くになって、突然激しい風雨が襲い掛かる。

乗合の人々、念佛するもあり安き心もなく、ひた濡れに濡れて、やうやく新宮の河原に著く、我勝に飛び下り、思ひ思ひに走り行けば、往來の男女通物せりとて、右往左往に立ち騒ぐ、如何なる物の通りけるぞと問ふに、旋風通りて、人家三四軒巻き倒したりと云ふ、危き事共なり、清閑院に至り宿を乞ふ、頓て旦過寮に案内す、夜に入りて相見の禮あり、二三日滞留し、威儀を寛て辨事すべしなど、いと懇なり。湯峰より本宮へ二十五町本宮より舟路九里八町

傍線を付したように、新宮の宿は本宮とは較べようもなく、懇ろな対応を受けた。

翌17日、熊野速玉大社に参拝し、続いて、

神倉神社に詣づ、石の階段四五町登れば、山の頂きに差し出でたる大巖あり、近き頃迄は六間に十間の社殿を其の巖に組み掛けて、珍らしき結構なりしとぞ、今はさゝやかなる祠堂を其趾に立てたり、徐福の墓は、熊野寺といふ處にあり、往て見れば田の中に三畝歩程草蕪の地あり、楠の老木二本枯れなんとて立つ、其下に七尺餘の青石に、秦徐福之墓と刻り付く、地名を熊野寺といふを見れば、昔は寺ありしならん。

と、神倉神社に触れ、近頃まで懸造^{かけづくり}の立派な社殿だったという。愚庵は懸造の社殿だったことを何かしらの情報で知っていたようである。因みに、『一遍聖絵』巻三第二段の絵画部分には、神倉神社拝殿の懸造が描かれている。因みに松崎照明氏の高著『山に立つ神と仏 柱立てと懸造の心性史』(講談社、令和2年5月)巻末の表「主な懸造とその構造」によれば、創建は

正安元年（1299）以前、前身の建物は享保17年（1732）だと明記されている。

新宮では、上記の徐福の墓に加えて、飛鳥神社に詣で、新宮城址にも登っている。

翌18日には、三和崎から宇久井の浜を経て、勝浦へ向かい、那智を目指す。途中、浜の宮に至り、丹敷神社や普陀落寺（普陀落山寺）に詣でるが、普陀落寺で眼にした光景は、「本堂荒れ果て、唯柱ばかりぞ立ちたりける」という状態だった。

こうして、熊野の各地を実見してきた愚庵は、明治20年代中頃の熊野三山の寺社がいずれも荒廃して無残な姿を晒していることに、嘆息せずにはいられなかったのである。

いよいよ那智の地を踏む。先ず大門坂を登って、熊野夫須美神社（那智大社）へ参拝。それから隣地の普照殿（青岸渡寺）へ詣でる。

是より那智に掛る、坂下の鳥居より御社へ石の階段十八町、坂の両側には老杉立掩ひて、
いとかうかうし、本地は觀世音垂跡は同く十二社にして、熊野大権現と申し、を、今は
新宮と共に縣社となり熊野夫須美神社と稱へ奉る、右の方には大己貴命、次は家都御子
神、次は國常立神、次は熊野夫須美神、伊奘冊尊、事解之男神、三柱合殿にます、次は
御子速玉神、伊奘諾尊、二柱合殿にます、左の方の大殿には、天照皇太神、忍穗耳尊、
瓊々杵尊、彦火々出見尊、葺不合尊、國狭槌尊、豊淳斟尊、泥土煮尊、大戸之道尊、面
足尊、總て十柱合殿にませり、次に小きは建角身命の祠なり、扱て熊野三社の参詣は今
しも濟みぬ、玉垣を一重右に出れば、西國第一番と聞え給ふ那智山普照殿の御前にして
是ぞ順禮の打初めなる、仁徳天皇の御宇、裸形上人の開基にて、本尊は焰浮陀金如意輪
觀世音にぞおはします、今の堂は太閤秀吉公の建立なりとかや、此寺元は眞言宗なりし
を維新の際例の廢佛論の爲めに、尊像を麓なる寶泉寺と云ふに下し奉りしかば、御山に
は参詣する者跡を絶ちぬ、去れば山中の者共、其筋へ嘆き申、やうやう元の御堂に納め
参らせしかども、數年の間、住持もなく、唯村民にて護持せしを、後に天台の順孝法師
と云へるが住持して、今の姿に取り直し、遂に天台宗となしたりとなん、扱三十三所の
順序の由來を尋ぬるに、昔大和國初瀬寺の開山、徳道上人と聞え給ふが、攝津國中山寺
を一番と定め給ひしを、長徳元年三月十五日、華山法皇熊野の本宮を立ち、同き十七日
那智より打初め其年六月朔日、美濃國谷汲にて結願し給ひしかば、其時の御道順に従ひ
て今の番號に改まりぬと云ふ、又其道筋は、五畿内及び紀伊、播磨、丹波、丹後、近江、
伊勢、美濃などなるを、西國と云ふは、鎌倉時代に、關東にて言ひ習はしたる言葉なり
とぞ、幸にけふは十八日、觀世音の縁日なり、形の如く札を打ち、納經して御社の千木
の上に、夕月のほのめく頃、内陣に入りて参籠す。今日六里午後晴る

明治初年の廢仏棄釈のために、（華山法皇によって西國順礼一番札所となったという）青岸渡寺も、参詣者が絶え、さらに数年間無住と化し、その後高木順孝師が入寺して天台宗に宗旨替えたことに言及している。ここでも愚庵は許されて、夕月のほの灰めく頃、内陣内に参籠することが出来た。ちょうどこの18日は観音の日に当たったことの奇縁（二重下線引用者）にも触

れている。

明けて19日、回復した空模様の中で、早朝宿坊から那智の滝を眺め、一首詠じた。

天気よし、夜明けて堂を出て、鐘楼の傍より谷を隔て、瀧を望めば、心地自からすがすがし。
底^{そこついわね}巖根つき貫きて普陀落や那^{くだ}落も摧け那智の大瀧

上記の歌を、後年歌人の吉野秀雄は愚庵の絶唱だと称賛し、俳人・萩原井泉水は雄大な万葉調の調べであると絶賛を送っている。道中多くの歌や漢詩を詠んだ愚庵の文才を感じずにはおられない。

10月19日の記述はまだ続く。

午の下り迄宿坊にて休息し、點心の後、案内頼みて先づ大瀧の下に至る、瀧は數百丈の岩の上より、大浪の崩れかゝるが如く、綿を投げ散らすか如く、山もどよみて落ちたぎる、其勢凄しなんどいふ計りなし、しぶき、雨の如く數百歩の外に及び、瀧壺には容易に近寄るべくもあらず、笠被て行けば、疾風四に起り、白波高く渦巻て底も知られず、實にや此處には八大龍王も住みぬべくぞ覺ゆ、衣裳濡れて毛骨寒く、暫くも留りがたし。

懸河三萬丈。緣壁捲雲壽。自有神龍伏。威靈百獸逃。

飛瀧神社の拜殿にて暫く息ひ、猶二の瀧、三の瀧をも見物せんと、更に岩根を攀ち、葛葛にかかりて、峻しき山のかひを登り、十町餘りにして、大瀧の上流に出て、水源に遡ること七八町二の瀧に至る、大瀧の五分一にも足らず、又溯る三四町にして、三の瀧あり、二の瀧の半にも及ばず、扱て日來持ち馴したる撞木杖を、いぬる日、風雨に紛れて、本宮の川舟に取り忘れ、残り惜くは思へども、詮方なくて打ち捨たりしが、今三の瀧の傍に、黒文字といへるいと香はしき木の一握あるを見出し、嵯峨しき岩の上なれば、容易くは取り難きを、案内を勵まし、辛じて取り得たり、黒文字の斯く迄太きは、此わたりにも稀なりと云へば、いと嬉しく、丈けに切りて杖に作り、持ち試むるに、天晴の逸物、太く逞しければ是こそ那智黒とは名づけめ、はた瀧鹿毛とや呼ばん、など打興じ、歸るさ大瀧の上の落口に至り、巖角にすがりて下を見おろすに、手戦き目暈めく斗りなり。

昼食後、那智の大瀧に案内され、その凄まじさに驚嘆した表現が見られるが、その心情は五言絶句としても結実したのである。

二の瀧、三の瀧を案内されて帰りぎわ、大瀧の落口から下を覗いた恐怖感も正直に認められていて、興味深い。

続いて20日は、

奥院に參詣せんと、昨日取りたる黒文字の杖を携へ、若し道にて狼にもあれ、熊にもあれ、喰ひ合ひ居らんに、此杖もて引き分け遣らんは、一段の興なるべし、など獨り打戯

れて、岩根木根突き鳴らし、峻坂二十五町、いつしか登り著きぬ、先づ本堂に詣て、やゝ西に下り、大師堂に參る、杖餘りに重ければ、腕したゝかに勞る、堂の扉に打ち寄せて、能々見れば、珍木とは云へ、手首程の黒丸太、少しゆがみて、節くれ立ちたる、いと物々し、斯るもの引きかたげて歩まんには、例の花和尚にこそ似もせめ順禮とは誰が見るべき、頭陀の獨旅、旅亭だにも心安くは宿かさぬ程の人相して、行く先きの長き旅路に、如何なる憂目見んも知らず、(中略) 再び山門の前に出れば、東より南にかけて、或は突き出て、或は差し入り、山と海と打交りて、眺めよし、こゝより直に下里へ出る道も有りと聞けど、いと峻しと云へば、元の道へ引返し、觀音堂の裏門より入りて、再び本尊に禮拜し、井關へ下り、天滿を過ぎ、勝浦の濱を左に見る、去年の事かとよ、此浦の漁師、沖にて颶風に遇ひ、二百餘人は今に生死も定かならずとぞ、父母妻子の悲み思ひ遣らる、二時頃湯本の温泉場に至る、夜前より時候一と際寒く、肌心よければ、浴せまほしとも思はで行き過ぎぬ、市屋、下里などの山々打越えて、浦上に出て、入海を渡りて、西の岸に宿る、漁村なれば、野菜に乏し、薩摩芋の蔓を煮て添物とす、如何なるものも食へば食はるゝものなりけり。けふは六里半

の如く、奥の院に參詣後、引き帰した山門前で眼下の景色に一時魅せられる。元の道を引き返し、勝浦の浜が左手に見える辺りで、^{ひととき} 昨年の台風に遇い、多くの漁師たちが遭難、残された父母妻子の悲しみを思いやる。戊辰戦争時に行方不明となった愚庵の両親と妹への思いがダブっていると思ふのは、ひとり私だけであろうか。

この日は、漁村の浦上(那智勝浦町浦神)宿で1泊した。宿の食膳で眼にしたその地の食生活の一端は、薩摩芋の蔓を煮て惣菜として出されたことだった。勿論、愚庵は禅僧であり、此度の西国順礼に際しても精進料理を以て是としているのだが、この芋の蔓を食することは、初めての体験で、いささか吃驚仰天だったようである。

これ以降、愚庵はかつて京で一緒に修行した僧たちの寺々を訪うべく、中辺路ではなく、西国順礼の行程としてはあえて遠廻りの大辺路を辿って、田辺の地に到着したのは、6日後の10月25日のことだった。

7

かくて天田愚庵は、二番札所以下の西国三十三観音霊場も恙無く参拝を終えて、時あたかも12月21日の昼下がりに、京・清水産寧坂の草庵に帰着した。都合93日、400里余りの行程である。

帰着後、愚庵は次のような仏足石歌(五七五七七七)二首を、

みそじあまりみつ みやま みほとけ つかえ ちちはは もろびと
 三十余三の御山の御佛にまつらく父母のために 衆人のために
 みそじあまりふたつ かたち わた すく
 三十余二の相ふだらくの光りあまねく度し給はな。濟ひたまはな

と詠んでいる。即ち、一首目は父母の菩提安穩と、衆生の観音との結縁を願って、御仏に仕え

たいという思いが読み取れるのである。また、二首目は順礼を終えるに際して、仏の三十二相に謝する思いが籠められている。

上に眺めてきた熊野三山に限ってみても、戊辰戦争のさなかに行方知れずになったままの父母に対する心情が強く窺われるのである。

(明治大学名誉教授・国際熊野学会顧問)

註

- (1) 『愚庵全集(増補改訂)』(政教社出版部、昭和9年7月)所収。引用は出来る限り原文のままとし、必要に応じて「ふりがな」を付したことをお断りしておく。
- (2) (1)に同じ。
- (3) 『血写経』。(1)に同じ。
- (4) 熊野古道伊勢路の人情や風俗、愚庵の心情等を省略したのは、第1回東大人文・熊野フォーラムでの発表時間の制約があったため。後日あらためて論ずることとしたい。

付記 本稿は、2020年(令和2)1月12日(日)、第1回東大人文・熊野フォーラム(於東京大学本郷キャンパス)で講じた「禅僧天田愚庵の『順礼日記』——`熊野詣で、を読む——」に基づくものである。

また、平成21年度「新宮市民大学・人文講座」(2009年9月5日)で講じた「禅僧天田愚庵と熊野詣で——『順礼日記』をひもとく」(於職業訓練センター)以来、今日まであたためてきた構想の一端であることを明記しておく。